ESSAY

LA DOLCE VITA

海とイタリアをこよなく愛し、ワイン、アート、マリン文化に深い造詣を持つ伊藤英一氏。
氏がこれまで体験してきた地中海のマリタイムの煌めきを中心に、海と食とボートに関わる彼らのライフスタイルを語る。

text & photo: Eiichi Ito

#47
ミラノ・ブレラ美術館とカラヴァッジョ

ブレラ美術館

イタリアへ行く時はミラノを拠点に移動することが多く、殆どの場合到着及び帰国時にはミラノに滞在している。フィレンツェのウフィツィ美術館やローマのヴァチカン美術館の様な大規模な美術館はミラノにはないが、中小の美術館が幾つもあるので、ちょっと時間出来ると気軽にあちこちの美術館を訪れている。

ブレラ美術館はブランドショップが建ち並ぶモンテナポレオーネ通りから徒歩圏内だし、よく宿泊するホテルからも近く、ルネッサンス期のヴェネツィア派の秀作も多くコレクションされているからお気に入りの美術館である。

新古典主義様式のファサードが美しい建物の前面広場に入ると、一階の美術学校の学生らしき若者が多く出入りしている。展示館は荘厳な階段を上がって二階にあり、38部屋に約400点の絵画展示はなかなかの見応え。ルネッサンス期の三大巨匠の一人ラファエロをはじめ、ヴェネツィア派最高峰のティツィアーノやその弟子ティントレット、更には中世フランドルのレンブラントやファン・ダイク等数え上げたらきりがない程の収蔵である。その中でもルネッサンス後のバロック期の天才画家カラヴァッジョ作品〈エマオの晩餐〉の秀作に特別な興味を抱いている。

カラヴァッジョ

カラヴァッジョの作風の最大の特徴は、光と影を際立たせたキアロスクーロと言う画法にある。実際に絵画に対面すると、その明暗の際立った画面から迸る人物の感情や情景が迫って来るのをひしひしと感じる。ルネッサンス期の古典的理想表現の絵画とは明らかに異質で、その革新性が後世のヨーロッパ絵画に多大な影響を及ぼしたと言うのも頷ける。バロック期にはオランダのフェルメール、フランドルのルーベンス、スペインのベラスケス等の有名画家がいるが、カラヴァッジョもその一人に数えられる。

38部屋ある美術館を奥へ奥へと進むと、1606年作とされるカラヴァッジョ〈エマオの晩餐〉と対面する。横幅2m近くもある絵画は迫力充分だ。日本でのカラヴァッジョ展では30秒ですら留まって鑑賞する事は不可能なのに、ブレラでは混雑する事なく絵画と対面する椅子に座って思う存分鑑賞出来た。エルサレム近郊の街エマオに復活したキリストが、弟子達と夕食を共にすると言う設定だが、キリストの顔が実に素晴らしい。

中庭に面して建つ新古典様式のファサードが美しいブレラ美術館。いつもは空いている館内だが、この時は高校生らしきグループに美術教師が熱心に解説していた。美術館内では絵画修復作業がガラス越しに見学出来るのも珍しい。右の2点はカラヴァッジョの終焉の地ポルト・エルコレのマリーナ。ローマの人々の別荘が点在し、豪華なスーパーヨットが係留される等、なかなか華やかなリゾート地である。

15世期ミラノ生まれのカラヴァッジョはローマで画家として名声を得る。絵を一枚仕上げると1～2か月は剣を携え酒場や裏社会に出入りすると言う無頼漢振りで、ある時殺人を犯してしまう。命辛々マルタに逃亡してマルタの騎士団に入るが、そこでも問題を起こしてナポリへ行く。

その後多くの高名なパトロン達が恩赦を申請し、カラヴァッジョはナポリから小舟でパトロンへのお礼として3枚の絵を携えローマへと旅立つ事となるが、時化に遭遇してローマの北のポルト・エルコレに漂着してしまった。衰弱し高熱を出して1609年死に至るが、39歳の若さだった。(コスタンティーノ著『カラヴァッジョの秘密』、宮下規久朗著『カラヴァッジョへの旅』)

ポルト・エルコレ

僕はかつてカラヴァッジョの終焉の地を求めてポルト・エルコレ(Porto Ercole)に行った事がある。ローマから近い風光明美なリゾート地のマリーナには裕福なローマの人々のスーパーヨットが係留され、高台には17世紀にスペインの征服者が建てたフォルテ・ステッラという要塞がそびえている。一時期女優ソフィア・ローレンが所有していた要塞跡からはティレニア海(地中海の一部)の紺碧の海が望める。その要塞に立ってカラヴァッジョの数奇な運命に想いを馳せたのだった。

第二次世界大戦後のこと、ポルト・エルコレの道路工事中に遺骨が発見されDNA検査によってカラヴァッジョのものと特定された。調査の結果鉛中毒病だった事も分かった。当時の絵具には鉛が含まれていた事が知られている。10年程前カラヴァッジョ生誕400年を記念して立派な墓碑が建立され、静物画をモチーフにしたオブジェが石棺の上に置かれた(ミラノのアンブロジーナ絵画館では彼の静物画〈果物籠〉を見る事が出来る)。僕は墓碑が建立される以前にかの地を訪れていたので残念ながらその墓碑には接していない。

余談になるが、イタリアの旧紙幣リラにはダヴィンチ、ラファエロ、ミケランジェロ、ティツィアーノのそうそうたる画家の肖像が採用されたが、カラヴァッジョがリラ札の最高額だった。つい数年前には南仏の民家の屋根裏から一枚の絵が見つかり鑑定の結果カラヴァッジョの未発見のものと断定され、推定価格が150億円というのには世界中が驚愕した。

数年前ローマに滞在中、ボルゲーゼ美術館での〈カラヴァッジョとリュートの調べ〉というイベントに出かけた。カラヴァッジョ作品の前で中世の民族衣装の女性が男性リュート演奏に合わせ歌うというイヴェントにも関わらず、何とカラヴァッジョの作品二点は「いま日本に貸出中」とあった。

昨年から今年にかけて日本の各地でカラヴァッジョ展が開催され、展覧会の冒頭には次の様な言葉が記されていた。〈神か。怪物か。天才画家の闇と光〉〈超絶画力――何者なのか? カラヴァッジョ〉 ***P.B.***

Profile

伊藤英一
事業家。ボート歴は10代から既に半世紀以上。欧米の多くのリゾート地を訪れ、その土地の食やワイン、アート、音楽等に触れることを至上の喜びとしている。RIVAとRIBの熱烈な愛好家。